

週刊新潮

9月19日号
420円



35



ガイドブックには載っていない ミャンマーの 「ジャパン・パゴダ」

信仰心厚いミャンマーの人々が、最近、こぞって訪れる地がヤンゴン郊外にある。約2600年前に作られたという最古級の仏像(写真)を始めとして、ミャンマーの国宝級の仏像を多数拝める寺院の愛称は、「ジャパン・パゴダ」。「ジャパン」を冠しながら日本人には殆ど知られていない、その寺院とは。

撮影 福井尚紀

約2600年前、釈迦がまだ生きていた頃に作られたという「ムニマハ・ムニ・シャカ像」。何重にも貼られた金箔が眩しい。



手前の「リャウン・タウム・シャカ寝像」を始めとして貴重な仏像がズラリ。

ガイドブックには載っていない
ミャンマーの「ジャ・パン・パゴダ」



①右ひざを曲げ、今にも歩き出そうとする姿の「ヤタウム・シャカ像」。
②人でごった返す「大聖堂」前。同じ仏教国のタイや台湾からも参拝客が訪れる。

現

在、雨季のミャンマー。この時期、人々は遠出を好まず、家や近場で大人しく過ごすことが多いという。

そんな季節にもかかわらず、このパゴダは連日人で溢れかえっている。ミャンマー最大の都市、ヤンゴンから北東へ車で2時間ほどの田園地帯に、突如現れる「アウンザブタイヤ寺院」だ。商業施設を思わせる5階建ての「大聖堂」は、1階が講堂になっており、参拝客はここで僧侶から法話や寺院の由来を聞き、上部階に安置されている301体の仏像の元へと進んでゆく。聞けば、それらは一つ一つが御本尊クラスの貴重なもので、扉頁の2600年前の釈迦像を始めとして、世界でここだけの珍しい仏像ばかりという。



昨年12月に完成した5階建ての「大聖堂」。

しかも入場は無料で、食事も振舞われる。休日には5万人もの参拝客が訪れたこともあるそう。

まるで遊園地のような賑わいを呈する寺院の設立に寄与したのが、配管防錆装置を主力商品とする日本システム企画株式会社の熊野活行社長だ。

縁あってミャンマーに滞在していた熊野氏は、2007年から始まった僧侶と軍部が対立する「サフラン革命」に遭遇する。その混乱の中で、軍によって困窮に追い込まれた寺院が、所有する国宝級の仏像を闇に流し始めていることを耳にした熊野氏は、

「一度国外に出た仏像が、ミャンマーに戻ることは決していない。なので、自費でそれらの仏像を集め始めたんです」
仏像収集が見つければ銃殺という情勢下。それでも、ミャンマーのためを思い、トラックの荷台に仏像を載せ、野菜で隠して運ぶなどして、2年で301体の仏像を自邸に運び入れた。

「いくらかかったかなんて言えません」
が、当時の財産は全て使い切りました」
政権が安定した12年に、全ての仏像をアウンザブタイヤ寺院に寄進。その功績から、いっしかこの寺院は「ジャ・パン・パゴダ」と呼ばれるように。

未だガイドブックにその名の記載はないが、ミャンマー人なら誰もが知る寺院となっている。